

施餓鬼会祭文

維れ令和元年の盛夏が到来、琵琶湖湖南の古刹東方山安養寺は山林を含む広大な境内に、べに紅色のサルズベリの小花が咲き乱れる。松林の緑も濃くなり清々として、永遠をこの一瞬に凝結ぎょうけつしたコケの庭は青あおもうせんを敷きつめている。群生海ぐんじょうかいの普遍ふへんのいのちと平等の慈悲がしみじみと戴かれる。

本日は観音堂において本尊観世音菩薩ご宝前こうかを香花さやく・茶菓、百味ひやくみ・五菓ごかの稀膳きぜんを備えて、一切きんるいの飢類くうに供じてお盆施餓会を執り行う。

さらに施餓鬼の壇もうを設けて餓鬼一切の七魂を弔う。仏道の修行ふたいてんに不退転いに入る熊谷俊亮住職の追善供養の正念場で、それに応じて大師流慈苑講じえん・山下登美宗大梵詠を筆頭とする講中のご詠歌の面々、ご参詣のご遺族の信心、信仰の開発により自他共に生き返る暑中の信と行の尊い修行、お盆会となる。当山安養寺も伝統のお盆会施餓鬼会を誠心誠意継続されぶっげん仏眼を点じて文字どおり至心に心底を打ち込しよつじようんでの読経。その功德を賜わりご詠歌の調べに雑念がほぐされ本来の清浄心ついでうにうち還えり、七き人への深い思いを追悼する。親や先祖はまさに仏なりである。

そもそもお盆施餓鬼の由来は、往昔おうじやく・インドにおいて仏教の開

祖・釈尊の十大弟子で神通力第一と称された目連尊者と七き母・

せいだいによ

精提女せいだいによの故事から始まる。暑中の今頃、目連尊者が気付いたのは、

せいだいによ

母の精提女があのお世でどのような姿でいるのだらうか、と。自分の神通力をもつてしてもわからない。そこで師である釈尊に尋ねると

けんどんむさい ごといん

がきききん くか

『そなたの母は“慳貪無際の業因”によって餓鬼飢饉の苦果を受け

お

ようじ

て地獄に墮ちている』と伝えられる。目連尊者は悲しみ嬰兒の如く

ていきゆう

けんどんむさい ごといん

啼泣する。慳貪無際の業因とは、生前に物を惜しみ、むさぼり欲く深い。ケチで欲ばりでなさけ心のない人のことをいう。母を救うに

しやうねつ

はどうするものかと釈尊に問うと 今、焦熱と降雨の激しい時期、

たくはつ

じし

外に出て托鉢の出来ない僧侶は自恣という部屋でじっと修行している。この人達や食物に不自由している人々へ布施して食物を与えよ』といわれ早速に実行する。すると母は地獄より救われたという。

しやうじや

ここで、目連尊者のような大聖者の母がなぜ地獄に墮ちたのか、という疑問が生じる。子供を育てる母の苦労は今も昔も変わりなく目連尊者の母もわが子のため物をおしみ、いつくしみの心を失ってしまったのでないか。さらに食物がなければ子供のため盗んでも手に入れるーそうした罪を母は背負って死んでまでその罪で地獄の苦しみを受け続けている、とこの故事は論じているのでないだらうか。

りんねてんしやう

ごと

おこな

迷いの世界で何度も生まれ変わる輪廻転生。人間の業すなわち行

ななよ

いは次の世まで、いや七世にわたってついてゆくといわれる。親の業を

知らず自から偉くなつた、と思う目連尊者を救つた釈尊の教えとは、
親の心を知れ、おのれご思を知つて己の足らざることを恥じよ、追善の心
を起こせよであつたと思う。

ここに釈尊のこの善巧方便、目連尊者の大苦厄を救い給う施餓
ぜんぎょうほうべん 会にご参詣されし功德の施主の方々、地獄に苦しむ飢饉類に布施
くどく を供じられ、そのおかげをもつて、無量無辺の供徳を預かり、すみ
せしゆ やかに逍遙として自在の法味を受け、一層の安樂界に悠々されんこ
しょうよう とを。
じざい

願似此功德 がんにしくどく 普及於一切 ふぎゅうおいつさい
我等与衆生 がとうよしゅうじょう 皆供成仏道 かいぐじょうぶつどう

令和元年八月四日

京都府向日市寺戸町西垣内十五―六四

亀光庵

住職 土口哲光 敬白